

## 大規模災害から命を守るための避難と災害関連死

広島大学名誉教授  
鳥谷部茂 Shigeru Toriyabe

### I 問題提起

本稿では、最近の大規模災害の教訓から、防災減災について検討・解明すべき論点は数多くあるが、災害から命を守るための適切な避難訓練及び避難と適切でなかった避難訓練及び避難、災害では助かったが自宅・親族宅や避難所等での劣悪な生活環境のために本来の死期を早めたと認定された避難（災害関連死）とに分け、その実態を明らかにするとともに、大規模災害から命を守るための2つの避難に限定して、どのように対応すべきかを検討する。

### II 鶴住居小学校・釜石東中学校の事例

まず、第1の課題として、釜石市鶴住居地区の釜石東中学校と鶴住居小学校の両校内の児童・生徒600人全員が地震発生後に避難を開始し、10メートル以上（気象庁の最終予想）<sup>1</sup>の高さで校舎を襲った津波から全員無事に避難できたのは何故だろうか。

釜石の奇跡とは、東日本大震災の津波が岩手県釜石市の鶴住居地区にある鶴住居小学校と釜石東中学校の両校舎に襲ってきたが、両校の児童・生徒600人全員が無事避難したことについて

て呼ばれた見出しである。これに対して、次の第2の課題である釜石の悲劇は、同じ鶴住居地区で川向側にある2階建ての防災センターに240人余りが避難し207人が死亡したことにより名づけられたものである。前者が本件の適切な避難例であり、後者が適切でない避難例である。

#### （当日の経緯）

2011年3月11日午後2時46分、地震が発生したとき、隣接する釜石東中、鶴住居小とも下校直前のホームルームやクラブ活動を始めていた。同中の校長は公務で外出、M副校長は職員室にいた。「揺れの大きさと津波が来ると思い、放送で避難を指示しようとしたが、停電で使用できなかった」という。M副校長が校庭をみると地割れがあり、声をかけようとしたが、すでにサッカー部員は「津波が来るぞ」と叫んで走り出していた。ほかの生徒も校庭に集まり始め、教員の指示で、先発の避難者に続いた。午後3時、隣の鶴住居小では児童らは最上階の3階など校舎内の避難行動にとどまっていた。同小も校長が不在だったが、中学生の避難をみた教員の指示で、小学生も避難を始めた。15分後、児童・生徒とも第1避難所のグループホーム「ございしょの里」にたどり着いた。すなわ

1 気象庁の当日の予報では、予想される津波の岩手県沿岸で高さ3メートル（14時49分）、6メートル（15時14分）、10メートル以上（15時30分）と修正された。当日襲来した津波の高さは、原口強＝岩松暉「東日本大震災津波詳細地図 上巻」（古今書院、2011年）によると、釜石東中学校付近で11.46メートルとされている（釜石市「釜石市鶴住居地区防災センターにおける東日本大震災津波被害調査報告書」（2013年）39頁参照）。予想の多くは岩手県内沿岸全体の予想であり、個別の各湾内や河口口での高さは異なってくることに留意しなければならない。